

競馬がますます  
楽しくなる

続 ファンにやさしい

# 馬学講座

第33回

## 輸送が競走馬に与える影響について②

講師

大村 一 さん

JRA競走馬総合研究所



案内人：辻谷 秋人  
text by Akihito Tsujiya

長距離・長時間の輸送による  
パフォーマンスへ影響は？

前号では、競走馬にとって輸送は決して小さくないストレスであることを解説したが、そのストレスの原因を、ここでもう一度確認しておこう。

- 1 住み慣れた環境（厩舎・馬房）からの隔離
- 2 馬運車内などにおける拘束
- 3 馬運車内の振動、騒音、空気の汚れなど

であると考えられる。そして、移動時間が20時間を超える長時間になると、ストレスに起因する発熱、いわゆる輸送熱を発症することがある、というのが前回の話だった。

長時間輸送が競走馬にとって大きな負担になると聞くと、心配になるのが海外への長距離輸送である。この号が発売されるころには結果が出ているが、今年も凱旋門賞に3頭の日本調教馬が出走した。長距離・長時間の輸送が、彼らのレースでのパフォーマンスに影響することはなかったのだろうか。

今回も、JRA競走馬総合研究所の大

村一さんにお話を伺っていく。大村さんは、実際にベルギーのブルージュから日本までの輸送に立ち会って、調査を行っている。今回はその貴重なデータを元にした話である。

### 輸送中の心拍数の変化と副交感神経の活動変化

さて、ヨーロッパ・日本（あるいは日本・ヨーロッパ）の輸送とはいっても、そのすべてが航空機による輸送ではない。元々過ごしていた厩舎から空港（検疫所）までは馬運車による輸送になる。

「このときはアムステルダム経由での輸送だったので、ブルージュからアムステルダムまでが5時間の陸上輸送でした。アムステルダムで飛行機に積み込む馬輸送専用のストールに移って6時間待機、そして10時間のフライトで成田に到着した後は再び馬運車に積み替えて厩舎へ、という流れでした」

この輸送での輸送中の心拍数の変化を調べたのが、図1だ。馬運車に乗った直後は高かったが徐々に下がりが、飛行機で飛んでいる間はぐんと上がっている。これだけ見るとフライト中の馬は緊張したりストレスを感じているように思えるが、

一方で副交感神経の活動変化を見ると図2のようになる。

「こちらでもフライト中の値が高いですが、この指標はリラクセスの度合を見るもので、高いほどリラクセスしているのです。つまり馬は馬運車の中よりも飛行中の方がよりリラクセスして過ごしているということになります」

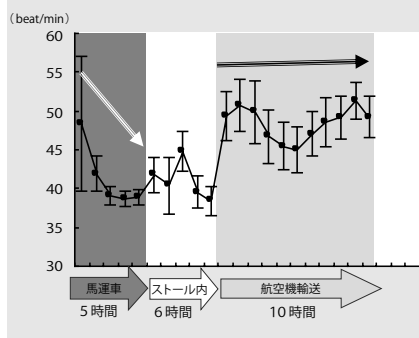
大村さんによれば、飛行機が快適な乗り物だからだろう、という。馬運車のように頻繁な加速減速やカーブはなく、振動や騒音もないわけではないが小さく、排気ガスの臭いもしない。飛行機は人間にとっても（気流が大きく乱れることさ

えなければ）たいへん快適な乗り物だが、馬にとっても同じだと考えられる。

「空気もフィルターにかけられたものが循環していて、温度や湿度もほぼ一定に保たれていましたし、埃やガスの量も馬運車と比較するとずっと少ない値でした。航空機という手段についていえば、馬のストレスは陸上輸送よりむしろ少ないと言っているだろうと思います」

飛行機はさほどストレスにならないにせよ、やはり移動時間は長く、日本とヨーロッパとは時差もある。その影響はないのだろうか。次号では、そのあたりのお話を伺っていくことにする。

【図1】輸送中の心拍数の変化



【図2】輸送中の副交感神経の活動変化

